
星屑たちの祈り

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑たちの祈り

【Nコード】

N4773W

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

スノウが目覚ますと、そこは見慣れない世界だった。違和感を覚えるも、それが何かを認識することができない。なぜなら、スノウには名前以外の記憶がなかったから。白い虎と緑の龍に拾われ、スノウは徐々に世界を知っていく。しかし募っていく焦燥感に駆られ、スノウは見知らぬ世界を歩き始める事にした。それが一体、何を意味しているのかも知らずに。

物語の都合上、残酷な表現・不明瞭な部分が見られます。不明瞭な部分は進んでいくと分かります。気長にお待ちください。

世界観紹介（前書き）

世界の部分のみでも支障はありません。

種族（型）や属性は出るたびに物語の中で軽く紹介するつもりで
はいます。

世界観紹介

このお話はハイファンタジーに近いです。なのでいわゆる常識が通用しません。なので、世界観紹介を付ける事にしました。この要点が分かっていないと、非常に読みにくかったりします。すみません。

思いつく限りでしか上げられないので、良く分からない、ここはどうなってるの？ などと気になった所があれば指摘してください。内容によっては物語上、回答できない事もあります。ご了承ください。

・世界

この世界は常に夜の状態です。星も多いです。いわゆる「時間」の概念が存在しません。それぞれ好きな時に、好きなように過ごします。

住人達は、基本的に睡眠や食事を必要としていません。ですが、気絶する事があります。意識して眠る事も可能です。食事も摂れない訳ではないので、嗜好品として人によっては摂取しています。

果物などは町の外の木になっていたりします。植物の生態系は変わりません。ただし、日光を必要としてなかったりと、様々な不明点は見られます。

・種族（「型」^{かた}）とも。この世界では同義語として扱われます）

この世界には大きく五つの種族が存在します。なお、それぞれの種族に身体能力の差は全くありません。ただし、獣型は例外扱いとしています。

人型：限りなく純粋な人に近い姿をした種族。色など人と異なる部分が必ず存在します。獣型と同じくらい、珍しいです。そのため他の種族からは羨望と強い嫉妬を受けます。この世界では一番危険の多い種族です。

獣人型：人と獣の姿が混在した種族です。個体差が強く出るため、獣に近い獣人型（顔が獣など）や人に近い（耳や尻尾があるだけなど）獣人型がいます。もつとも多い種族と言えます。

竜人型：人と竜の姿が混在した種族です。こちらでも獣人型と同じく個体差があります。作中では「竜」と「龍」の字が混在しますが、これは西洋に近い型を「竜」、東洋に近い（蛇っぽいの）を「龍」としています。

機械型：人と機械の姿が混在した種族です。こちらでもやはり個体差が出ます。ちなみに動きは機械っぽくありません。言葉も普通に発します。機械型というだけあって面白い姿をした者もいますが、話の都合上、出ない可能性があります。「機械だからすごいんじゃないの？」と先入観にとらわれるかも知れませんが、運動能力は他の種族と変わりません。

獣型：文字通り、獣の姿をした種族です。この世界で唯一、獣の姿をしています。そのため、出来そこないとして扱われる事が多く、嫌われ者です。人型と同じくらいか、それ以上に少ないです。この種族は例外として、運動能力が他の種族と比べて抜きんでる事が多いです。運動能力は獣の種類に依存します。

・属性

種族以上に重要な要素です。基本的にこれによって得意なもの、

苦手なものが分かります。種類が豊富で、住人ですら知らない属性も存在する時があります。物語の中で出た場合のみ、随時付け足していきます。

ワタ属：この世界では特に多い属性。弱点も一番多く、とても弱い属性です。他の種族より遥かに部位の切断が容易で、その上燃えやすい性質を持っています。ただし、打撃と水には強いです。切り傷の修復も一番容易で、異物を身体の中に入れる事も、取りだす事も容易に行えます。もっとも、その分身体が大きくなったり太くなったりします。他の属性に比べると、非常に柔軟な身体です。

弱点も多いですが、利点もかなり多いです。ちなみに汚れや塵など埃は落ちにくいので、そういった環境をかなり嫌っています。

鉄属くろがね：この世界ではそこそ多い属性です。打撃、斬撃に強いです。ただし、強い衝撃を受けると身体が凹む事もあります。ですが、凹むことは滅多にありません。

火に強いですが、熱はかなり持ちます。水に非常に弱く、長時間使っていると身体に不具合が生じます。おまけに、生じた不具合はなかなか治りません。とても打たれ強いですが、弱点にはとことん弱いのが難点です。ちなみに汚れは非常に落ちやすいので、一部のワタ属からは羨望を受けていたりします。

・その他
『パーツについて』

この世界に存在する人々は、同じ属性であれば身体のパーツ交換が可能です。ただし属性が違う場合は交換できません。

なので、身体のパーツを取り扱う仕事もあります。ただし、それは他人のパーツを交換、というより奪う行為となります。警察は存在しませんが、非合法の組織としての位置付けで問題ありません。

ちなみにパーツの一番人気は人型です。

『砂時計について』

この世界に存在する人は必ず持っています。この砂時計が何を計っているのかは、物語上、明かせません。

世界観紹介（後書き）

ここまで読んでくださった方はお疲れ様でした。ちなみに随時追加されます。

それでは、本編へどうぞ。

プロローグ（前書き）

少し悲しい話になります。シリアスです。

ブローグ

サラサラと、何かが流れていく音がする。

その音を聞くと、言い知れない不安を覚える。

急がなくてはならない。立ち止まってはならない。

理由は分からなかった。

けれど、ひとつだけ言える事がある。

私は、急がなくてはならない。

すべてが手遅れになる前に。

古びた本に囲まれて、その人物は椅子に深く腰をおろしていた。

どことなく優雅さを感じられる物腰。ただ、奇妙な事に、その人物は羊の姿をしていた。ローブに包まれているため、服の下はどのようになっているかは不明だが、顔はまぎれもなく羊。

ふわふわの毛に埋もれずに頼りなく垂れる耳。くるん、と可愛らしく巻いている角。不思議な事にその羊は眼鏡をかけている。そのせいか、どこか知的な印象を醸し出していた。

何かに気付いたかのように、羊はふむ、と読んでいた本から顔を上げる。

「また誰かが来たようですね」

羊はこの町の主だ。この町の事ならば自分の体の事のように分かる。実際、町で何が起こったのか手に取るように理解していた。

羊は目を閉じ、その人物がどこに落ちたのか探る。

古びた路地。ゴミ置き場。羊と同じように二足で立っている、白い虎と緑の龍の姿が見えた。二人はそれぞれの腰に大きく反りの

ある剣を帯びている。湾曲刀だ。それ自体は珍しい事ではない。問題は持つている人物たちにこそある。

「おやおや、これは……。運がよいですね」

羊はかすかに笑みを浮かべる。

二人は羊の顔見知りだ。それどころか、この町にいる人で知らない人はいないほどの有名人だ。

彼女にとっては、運が良いだろう。しかし、彼にとっては悪かったと言うべきか。彼の残り時間は、もうない。しかしお人好しな彼は、そんなことなど気にせず彼女を救うだろう。その様は見なくても想像する事ができた。

羊は椅子から立ち上がり、持っていた本を書棚にしまう。

「さて、彼女は願いを叶えることができるのでしょうか」

近い内にやって来るだろう来訪者のために、羊は準備をする事にした。

1 - 1 白い虎と緑の龍（前書き）

読みにくい言葉の振り仮名を追加しました。内容は変わっていません。

1 - 1 白い虎と緑の龍

真っ暗だった。頭がぐらぐらする。まだ馴染んでいないんだ、とぼんやり思う。何が馴染んでいないのかは全く分からないが、不思議と不安はない。

「おい、起きろ。こんな所で寝てると色々持っでかれるぞー」

張りの良い声が耳に入る。それに呆れるように几帳面そうな声が続いた。

「クラウド。そんなやる気のない方法で起きると思ってるのか。それに色々では、はっきりとしない。もっと具体的な言葉で説明した方がいいだろう」

豪快な笑い声が響く。

「アクセル、お前は細かすぎる。俺ぐらいドーンと威張ってバーンと適当で良いんだ！」

「意味が分からん。分かる言葉で説明してくれ」

再び呆れたような言葉が耳に入っていた時に、視界が暗い理由をようやく理解する。

そうだ。目を開けないと、なにも見えない。

ゆっくりと、目を開く。建物で切り取られた空が見える。建物の隙間から見える空には、多くの星が瞬いていた。続いて身体が動くかどうか、確認しながら上半身を起こす。手をついた場所が不安定だ。手元を見ると、何かがたくさん詰められている黒いビニール袋が目につく。横になっている身体も不安定なのに気付き、周囲を見回すと同じようなビニール袋が大量にあった。ビニール袋の上に落ちたらしい、と働かない頭で理解する。

「おい、アクセル。お前がうるさくしている所為で起きちまったじゃないか！」

「どう考えたら、そういう結論になる。オレよりもお前の方がずっと、うるさい」

そこには白い虎と緑の龍が服を着て二足で立っていた。その事に違和感を覚えるが、すぐに霧散する。逆に、なぜ違和感を覚えたのかが分からなかった。

「それにしても、珍しいな。ここまで人型に近い奴は久しぶりに見る。俺はクラウド。お前さん、名前は？」

クラウドと名乗った白い虎は、にやりと鋭い歯を見せて笑う。恐怖よりも愛嬌を覚えるのが不思議だった。姿に反して、警戒心を抱かせない雰囲気を持っているからだろうか。

「……………」

「喋れないのか？ その口は飾りなのか」

答えないでいると、緑の龍は睨みつけるように目を細めた。するとクラウドは緑の龍の頭を思い切り叩く。

「ばっかやる！ お前が睨むから怯えちまってるんだろ。少しは自分の顔を自覚したらどうだ。あと、手前も名乗れ」

「アクセルだ」

クラウドに言われ、渋々といった具合にアクセルは名乗った。

「……………」

「おい、クラウド。こいつの口は飾りのようだ。もしかしたら、本当に別の場所から発声するのかもしれない」

「落ち着け、馬鹿モン。どう考えても、この子の口は俺たちと同じ位置だろう。もしかしたら、生まれたばかりなのかもしれない」

クラウドの言葉にアクセルは沈黙する。アクセルは目を細めてクラウドを見た。

「捨てよう。厄介事はお免だ」

クラウドは声を上げて笑う。アクセルは何が面白いのか分からない、と目を細めている。クラウドは視線を気にせず、アクセルの背を思い切り叩きながら目尻の涙を拭いた。そして歯を出してにやりと笑う。

「いいや、こんな面白いモンを拾わずにいられるか！ せっかくだ。拾ってここに慣れるまで面倒を見れば良い」

「本気で言っているのか」

ぼんやりと二人のやり取りを眺めていると、白い虎に腰を掴まれ、軽々と持ち上げられた。正面から見ている時は気が付かなかったが、クラウドは背に大きな両刃の剣を背負っている。アクセルの方を見ると、腰に大きく反りの入った湾曲刀を差していた。

「とりあえず、場所を移動しようや。ここじゃあ、妙なのに目を付けられんとも限らんからな」

アクセルは顔を逸らす、反対はしなかった。

三人は噴水のある開けた広場にやってきた。クラウドはゆっくりと腕から噴水の縁に下ろし、腰かけさせてくれる。

「さて、お前さんはここがどこか分かるか」

首を傾げると、アクセルが目を細める。

「口で答える。それとも、まだ使い方が分からないのか」

「そう焦らせんな。言葉を出そうと意識してみろ」

意識。あの人は、どうやってたつけ？

「……こと、ば」

口から掠れたような声が出た。しかし発声方法が分かれば、後は簡単だった。淀みなく言葉が出てくる。

「ここは、どこ？」

アクセルは鼻を鳴らして顔を背ける。それに対し、クラウドは大口を開けて笑った。

「ほらな、喋れただろう。ようこそ、俺たちの世界へ」

意味が分からず首を傾げる。

「……？」

「理解できていない様だぞ。それに何だ、俺たちの世界とは。傍から見て痛々しい言動はやめろ」

アクセルは呆れたような溜息を吐いた。

「かっかっかつ、そう言うな。これが俺の最大の利点だ」

「汚点の間違いだ。話が逸れている。ここは始まりの町だ。お

前、名前は何だ」

問われて首を傾げる。

名前。

唐突なイメージが脳裏をかすめる。

白い何か。空から落ちてくる。寒い。冷たい。触りたくても触れない。消える。儚い。

「スノウ」

気が付いたら無意識の内に答えていた。クラウドはにやり、と笑う。

「そうか、スノウか。似合いの名だ。生憎あいにくと雪なんぞ、お目にかかった事がないがな」

「……雪？ 雪とはなんだ」

クラウドは目を丸める。

「お前、知らないのか。雪と言えばほら……なんだ？ まあ、とりあえず、こいつにぴったりって事だ」

「……聞いたオレが馬鹿だった」

アクセルは諦めたように息を吐く。

「しろいもの」

二人はスノウに視線を向けた。アクセルは怪訝けげんそうな視線を向けているが、クラウドは面白そうに笑っていた。

「こいつは知ってるみたいだぞ。なるほど、白いものか。そう言われればそうだった気がする」

「気がするって……。確かに、こいつの髪は真っ白だな。目は蒼い
が」

スノウは肩に落ちている自らの長い髪を掴つかんで、目の前に引き寄せた。確かに白い。真っ白だ。その際見えた手に違和感を覚える。

スノウは自らの手と、クラウドの手を見比べた。

「……ちがう」

「おう？ そりゃあな。種族が違えば違うだろ」

「しゅぞく？」

「おうよ。俺は獣人型だ。アクセルは竜人型だな。んで、お前は純粹な人型に近いな。見てみれば分かる」

クラウドに促され、スノウは噴水の水を覗きこむ。

そこには人がいた。長い白い髪を無造作に流し、今も一部が水面に落ちて濡れている。目は蒼く、青空を彷彿ほうふうさせた。細い身体をしている。女、と呼ばれる身体だ。その女は水面に手を伸ばし、自分に触れた。水面に映る姿が歪む。

「この辺りでは珍しいからな。気を付けた方が良い。パーツの素材も良く出来ているから盗られる可能性も捨てきれん。しばらくは俺たちと一緒にいた方がいいだろう」

「？」

言葉が難し過ぎて理解できなかった。

「とりあえず、ここにいるのも仕方ない。まず、リブランの所に行くのが先決ではないか？ 奴なら必要な知識を詰め込んでくれるだろうから」

アクセルの言葉にクラウドは頷く。

「それもそうだな。よし、だったら羊さんの所に行くとするか」

1 - 2 勤勉な羊

スノウはクラウドの言葉に首を傾げながらも、二人の後ろをついて歩く。スノウの様子に気付いてか、アクセルが説明し始める。

「この町の町長をしている奴だ。羊の姿をしている。名前はリブラン。世話好きなんだが、お節介が過ぎる所もある」

「ひつじ……」

スノウは羊を想像してみる。羊はふわふわの毛並みをしていて、丸い角を生やしている印象だ。実物は一度も見た事はないが、概ねおおむそんな所だろう。

そこまで思い至り、不思議に思う。

（見た事がない？ なら、どうして私は知っているのだろう……）
そもそもスノウは生まれたばかりだ。なのに、なぜ自身ですら知らないはずの事を知っているのか。

「あと、あの羊さんはこの世界で一番物知りだ。知りたい事があるなら聞くといい。ある程度の事なら答えてくれるさ」

「時々、妙な言葉で返されるがな」

クラウドは苦笑いを浮かべる。

「まだ早い、いずれ分かるってやつか？」

「ああ。俺は何回かそれで追い返された事がある」

アクセルの淡々とした物言いに對し、クラウドはばつが悪そうに顔を背けた。

「そりゃあ、そのまんまだからな……」

アクセルは眉根を寄せる。

「クラウドに言われると、馬鹿にされた気がする。むしろ馬鹿にしている。オレはお前よりも頭が良いつもりだ」

クラウドはその言葉に大笑いした。

「かっかっか。それは俺を馬鹿にしているのか？ 一応、俺はお前よりも長くこの世界にいるんだが」

「それは関係ないだろう。普通、この世界に生まれたのなら最低限の知識はある。知識と経験と頭の出来は全くの別物だ。オレはお前の様な、行き当たりばったりな思考はしていない」

「お前が俺をそういう日が来るとはな、アクセル」

クラウドはにやり、と笑う。分が悪いのを悟り、アクセルは鼻を鳴らした。

「……………」

スノウは二人のやり取りを無言で眺めている。話についていく事が出来ないため、理解するために二人の会話に耳を澄ませていた。

「おお、そうだ。スノウ、お前は外を出歩く時は気を付けた方が良いぞ」

クラウドの唐突な言葉にスノウは首を傾げる。

「注目されている事に気付いていないのか」

アクセルに促され、スノウは周囲を見回す。

いくつかの視線と目があった。その視線はあまり歓迎できるものではない、と雰囲気理解する。中には、あからさまにスノウを値踏みしている様なものであった。

「さっき言ったように、純粋な人型は珍しい。スノウは純粋な人型に近いからな。それだけでも狙われる。近寄ってくる奴は無暗に信用しない方が良い」

「わかった」

スノウは頷く。

「オレ達が一緒にいるって事も関係しているがな」

アクセルの呟きにスノウは首を傾げたが、答えるつもりは無いようだった。

煉瓦で造られた建物の中に入ると、古い本の臭いが鼻をついた。

スノウは中に入り、目を丸める。

「……………ほん？」

天井近くまである本棚にスノウは驚く。その本棚には隙間なく、

本の背が並んでいた。クラウドはスノウの様子に驚いた様に振り返る。

「よく分かったな、これが本だって。俺は羊さんに聞いて初めて知ったぞ」

アクセルは近くに置かれていた本を持ち上げ、本の中を眺めた。
「……本？　なんだ？　このミミズがのたくった様な黒いモノは、生き物か？」

本のページを捲り目を細めている。クラウドもアクセルの手元を覗き込み、首を傾げた。

「さあ？」

「もじ」

スノウは呟くように答える。二人が反応するよりも早く、近くから靴音が響いた。

「よくご存じですね」

そこには羊がいた。ふわふわの毛に埋もれずに頼りなく垂れる耳くるん、と巻かれている角。それに加え、その羊は眼鏡をかけていた。

「……………」

紛れもなく羊だ。それが二本足で立ち、本を抱えて立っている。

「見ない顔ですね。生まれたばかりでしょうか」

尋ねているというよりは、確認している様だった。

「そうだ」

クラウドは肯定してにやり、と笑う。

「ここまで純粋な人に近いのは珍しいだろ。お前さんでも、やっぱり羨ましいと思うのか？」

羊　リブランは眼鏡の奥で目を細めた。

「いいえ、羨ましいとは思いません。……むしろ、憐れです」

リブランは抱えていた本を棚に仕舞う。

「さて、どういったご用件でしょうか」

「こいつの面倒をしばらく見てほしい。必要な知識が抜けている様

だから、それも教えてやってほしいんだ」

リブランはほう、とスノウを観察した。全身を隈なく観察したか
と思えば息を吐き、首を振る。

「無理ですね」

「なぜだ」

アクセルは短く問いかける。リブランは微笑を浮かべた。

「彼女は少々特殊な存在でしてね。私も、本来でしたら喜んでお引き受けいたしますが、彼女は無理です。なにより、彼女は一つの所に留まる事は不可能でしょうね」

「……………」

スノウは首を傾げる。クラウドは腕を組みながらリブランを睨みつけた。

「どういう事だ」

「彼女に残された時間は少ない。クラウド、あなたにはその言葉の意味が分かるはずですよ」

先程までの快活さは鳴りをひそめ、クラウドは目を細める。

「彼女はおそらく、あなたの方の半分の時間しかない。そして、それを補うために通常とは異なる知識を持って生まれた。その代償がその姿なんです」

「さっきから何の話をしている。オレにも分かるように説明しろ」
アクセルは眉を顰め、二人を見た。しかし二人はアクセルを無視する。

「さて、お嬢さん。こちらに来てください。あなたに見せなければならぬ物があります」

スノウはアクセルを見て、クラウドを見つめた。クラウドは行って来い、とスノウの背を押す。スノウは頷き、リブランの後をついていった。

1 - 3 砂時計（前書き）

残酷な描写あり。設定上、血は出ません。

1 - 3 砂時計

本棚に埋もれるように隠れていた扉を開き、二人は中に入っている。こちらは先程の部屋と違い、壁側に一つだけしか本棚がなかった。その本棚にしても本が所狭しと並んでいる。正面には立派な木の机。その背には窓があり、星が瞬またたいているのがよく見えた。

リブランは応接用と思われるソファにスノウを座らせる。リブランは棚から食器を出し、紅茶を淹れた。机の上に出された紅茶をスノウは凝視する。

「これは完全に私の趣味です。知つての通り、我々は食事や睡眠は必要としませんか」

「……そうなの？」

スノウは反射的に聞いてしまったが、よく考えてみると常識だった。なぜ聞いてしまったのだろう。

リブランはカップを手に取り、香りを楽しんだ。

「そうです。本当にあなたはこちらの知識が欠けているようですね。それではこれから苦労するでしょう。最低限の知識は教えます。けれど、それ以上は自身でなんとかしてください」

スノウは頷く。リブランは目を細めた。

「まず、この世界は三つに分かれています。ここ、煉瓦の町。水の溢れる水の都。森に囲まれた緑の村。そしてそれらに囲まれるようにして中央に存在している砂漠地帯。ここまではよろしいですか？」

リブランはスノウの様子をうかがう。理解できていると判断し、説明を続ける。

「もう一つは型かたの事。クラウドのように獣を姿を模した、獣人型。アクセルのような竜を模している者が、竜人型。そして機械に包まれている、機械型。あなたのような、限りなく人に近い姿をした存在を人型と総称して言います。そこで大きく問題になるのが、人型の存在です」

リブランは紅茶を一口飲む。

「人型は珍しい。それ故に狙われます。知らないかもしれませんが、多くの人々は人型に対して強いコンプレックスを持ちます。それも無意識の内に。それこそ自らのパーツをあなたの物に置き換えようとするほどなのです。あなたは何属性ですか？」

「……ワタ」

「一番多い属性ですね。それこそ注意しないと本当に盗られますよ。しかも、ワタ属性は部位の切断も容易に行えます。捕まったら最後、全部持つてかれますよ」

スノウは首を傾げる。

「クラウドも アクセルも ヒツジさんも、なんで とらないの？」
「我々は興味がありませんから。私はこの身体で満足していますし、クラウドとアクセルはそもそも属性が違います。仮にそうだとしても、あなたから盗る事は不可能です」

自分の身体は珍しいから危険が多い、とスノウは理解することにした。危ない、と教えられても実感が沸かないというのが本音である。

「まあ、これが最低限ですかね。これ以上は教えても仕方ありませんし　ああ、そうだ。見せたい物があつたのでした」

リブランはソファから立ち上がり、机の引き出しを探り出す。目的の物はすぐに見つかったらしく、スノウの手を持ち上げ、その上に置いた。

小さな砂時計だった。しかし砂の流れは異様に遅く、なかなか下に落ちない。それどころか逆向きにしても、砂の流れる方向は変わらない。常に一定方向に流れ続けている。砂時計としては欠陥品だ。一体、なにを測っているのだろうか。

「差し上げましょう」

「すなだけい？」

意図が分からず、スノウはリブランを見上げた。

「ええ、砂時計です。なにを測っているのかは、その内に分かります」

すよ。特に大切に扱う必要はありません。壊そうと思って壊せる物ではありませんから。床に落としても、叩きつけても、割れないくらい頑丈です」

「……………」

スノウは砂時計を凝視する。砂時計はそんなに頑丈だったのだろうか。

「見たくなければ身体の中に入れる事をお勧めします。動く事に支障は出ませんから。なんでしたら、お入れしましょうか？」

スノウは何かを収納するための道具を持っていない。砂時計は手の平で包み込める大きさではあるものの、常に手で持ち運ぶとなると不便だった。

スノウは左腕を差し出す。リブランは微笑んだ。

「決断が早くて何よりです」

リブランはスノウから砂時計を受け取る。引き出しからナイフを取り出し、スノウの左腕を軽く切り裂く。その中に包み込むように砂時計を埋め、懷から裁縫道具を出して裂いた部分を手際よく縫い合わせていく。リブランは糸の処理を済ませ、スノウは確認のために腕を動かしてみた。違和感を感じられない。

「すごい」

「右と比べると若干、腕が太く見えるでしょうが、それだけです」

「ありがとう」

「いえいえ。私の用事はこれだけです。さて、戻りましょうか」

スノウは立ち上がり、アクセルたちの元へと歩き出した。

*

スノウがリブランと話している頃、アクセルは落ち着きなく部屋を歩き回っていた。その様子を見て、クラウドは呆れたように声を出す。

「おいおい、もう少し落ち着いたらどうなんだ？」

「……オレはいつでも落ち着いている」

「どうだか」

クラウドは苦笑いを浮かべ、懐からある物を取り出した。それは受け取ったその時から、止まる事なく常に一定方向へと流れ続けている。アクセルには一度も見せた事がない。見せたとしても、意味を理解できない事をクラウドは知っていた。

スノウよりも倍近くある大きな砂時計は、あと少しで全てが流れ落ちる。

その意味する所は

クラウドはそこまで考えて頭を掻く。

「らしくねえな」

泥沼に嵌^はまるであろう思考を振り払うために、クラウドは目を閉じ、背負っている剣を意識した。その剣の形を、別の形にイメージしていく。ここしばらく、暇を見つけては何度もしている行動だった。しばらくして、剣から微^{かす}かに手応えを覚える。

クラウドは笑った。

1 - 4 流れ者

スノウがクラウドたちの元に戻った時、アクセルはいなかった。

「おや、アクセルはどうしましたか？」

「あいつなら鬱陶^{うつとう}しいから外に出してきた。龍のくせに熊みたいにくろくろして、こっちがイライラしてくるってもんだ」

近くで見ている身にもなれよ、とクラウドは肩をすくめる。

「彼の落着かなさは相変わらずのようですね」

「おう。あれでもマシになったんだがな」

クラウドはもたれていた壁から離れ、スノウの元に近付いた。

「スノウ、悪いがアクセルを呼んできてくれ。俺は羊さんにちよいと用があるから」

スノウは頷くと、外へと駆け出す。クラウドはそれを見送った。リブランは目を細める。

「あなたが私に用事とは……一体、どんな厄介事なのですか？」
クラウドはにやり、と笑う。

「別に厄介事じゃねえよ。ちょっと確認するだけだ」

スノウが外に出ると、空には変わらず星が瞬いていた。

「……きれい……」

スノウは空を見上げて目を細める。

星なんて、久しぶりに見る……？

再び違和感。胸に小さな棘が刺さっているような感じた。

（気持ち悪い）

なぜ、こんな気持ちになるのだろうか。それさえ分かれば少しはこの気持ちは和^{やわ}らぐのだろうか。

スノウは考える。だが、いくら考えても答えなど見えはしない。

当然だ。スノウは生まれたばかりなのだから、知らないのが当然の事だった。

（なんで？）

知らないはずなのに知っている。だからこそ違和感が増し、頻繁に出る既視感きしかんを煩わづらわしく思う。しかし、それと同時に安堵もしていた。スノウ自身、そうした矛盾した思いに振り回されている。

（わたしは……一体、なに？）

不意に首元に強い衝撃が襲い、スノウは気を失った。

アクセルが扉を開くと、そこにはクラウドとリブランしかいなかった。

「おい、スノウはどうした」

アクセルは二人に近寄りながら尋ねる。

「会わなかったのか？ スノウはお前を探しに行ったはずだが」

「いや、会っていない。行き違ったか？」

クラウドは眉を顰ひそめる。リブランは変わらず微笑を浮かべていた。「さて、そういうえば最近、妙なのが町に出入りしていましたね。なんでも様々なパーツを取り扱っている流れ者だとか」

「なんだと！？」

その事が何を差しているかに思い当たり、アクセルはリブランを問い詰めようとする。しかしすぐに思い留まり、踵かかを返して走って行った。クラウドは呆れたようにそれを見ている。リブランはそれを意外そうに見た。

「おや、あなたは行かないのですか？」

「お前さんは見た目に反して相当そうとう、性質たちが悪い」

クラウドは目を眇すがめる。

「分かっていて、伏せていたんだらう？ ついでに、スノウの居場所も知っているはずだ。俺は、あいつからそう聞いている」

「あいつ？ 一体、誰の事ですか。そのような人はもう、この世界には痕跡こんせきすら残っていないはずです」

クラウドは剣をリブランの喉元に突きつけた。しかし剣を突き付

けられているにも関わらず、リブランは気にしていないかのように笑った。

「あなたは昔から短気でしたね。いつ頃からでしょう、あなたが笑う事で誤魔化すようになったのは」

「話を逸らすな。腹立たしいが、この町でスノウの場所が分かるのはお前しかいない。違うか」

アクセルはその事を知らなかった。だから時間を惜しみ、手掛かりなしで探しに出たのだ。

「その通りです。よくご存じですね。誰から教わったのです」

「居眠りな獏ほくだよ」

リブランは呆れたように溜息を吐く。

「あの人にも困った事です。機密事項にも関わらず不用意に漏らすとは」

「お前らの事情なんか知ったこっちゃないし、知りたくもない」

クラウドは目を細めた。

「さっさとスノウの居所を吐け」

走り去るクラウドを見送り、リブランは先程の部屋へ戻る。

「……これは、職務違反でしょうか？ 規定に抵触していないと良いのですが」

「問題ないですよ」

いつの間にか部屋には男がいた。男は純粋な人型の姿をしている。人と全く同じと表現しても、間違いではない。黒い紳士服に身を包み、顎には髭をたくわえ、頭にはシルクハットを被っている。気取った姿が妙に様になっていた。

「ジルでしたか。驚かさないでください」

ジルは優雅に腰を折る。

「これはこれは、失礼いたしました」

リブランはこの男が苦手だった。初めて会った時から受け付けないのだ。

表には心情を欠片も出さず、リブランは微笑む。

「それで、どんな用事でしようか。あなたが使い走りをされるとは、余程の事なのでしょう」

「そう大した事でもありませんよ。先程までここにいた、白い娘の事です」

＊

アクセルはあてもなく町を走り続ける。

外道^{げどう}が。

アクセルは舌打ちを禁じ得ない。

なぜ人の身体をそこまでして欲しがる。

アクセルには他人のパーツを欲しがる人の気が知れなかった。アクセルのような龍の姿も人気はある。しかしアクセルは属性から、狙われる頻度は異様に低かったのだ。

「アクセル」

「クラウドか。どこで油を売っていた」

横に並んだクラウドは苦笑いを浮かべる。

「スノウの居場所を突き止めてたんだよ。……しかし、お前の勘は相変わらず鋭いな」

「こっちの方角なんだな」

「おうよ。さっさとスノウを救い出しちまおうぜ」

「当たり前だ」

二人は目的地に向け、走った。

1 - 5 獣型

目を開けると、スノウは薄暗い部屋の中で蹲つすくまっていた。身体を起こして周囲を見回すが、見覚えがない。部屋全体が埃ほこりっぽく、壁に触れれば砂ちりのような塵が手に付いた。

（まだ、よく見えない）

スノウは膝を抱いて身を縮める。しばらくして、ようやく目が闇に慣れた。光りがあるのと同程度に見える様になり、スノウは歩き始める。

スノウのいる場所は、先程の町では見慣れない造りをしていた。部屋と部屋の境目に扉はなく、吹き抜けになっている。なおかつ床も壁も、天井までもが同じ素材。泥で固めてブロック状にした物で造られていた。手間がかかる上、スノウのようなワタ属性には最悪の環境だ。そうでなくとも長期間いれば、身体に不調をきたすだろう。ここを造った人物は、余程の変わり者だ。

スノウは立ち上がり、部屋を出る。今度は先程よりも大きな広間のような部屋に出た。高い位置で壁が何カ所か割り抜かれているため、星の明かりでぼんやりと部屋の中が照らされる。高すぎるため、そこからは脱出は出来ないようだ。横を見れば外に向けて、先程よりも大きく壁が割り抜かれている。そこから外に出る事は出来そう
だ。

それにしても、ここは何の用途で造られた建物なのだろう。

「あれ、起きちゃったよ」

割り抜かれて星明かりで影になっている部分に何かがいた。それは伏せていた身体を起こし、スノウを見つめている。

「……オオカミ？」

黒い狼だった。何かで身体を覆っているのか、毛は撫でつけられている。ゆつくりとした足取りで、狼はスノウの元へ向かった。

「大人しくあの部屋で寝ててくれないかな？　ボクは君みたいな人

型が、大嫌いなんだ。ボクの自慢の牙と爪でぐちゃぐちゃにされたくなかったら、早く戻ってよ」

「あなたは？」

狼はスノウを睨みつけ、鼻を鳴らす。

「見て分かる通り、獣型の人間。笑う？　好きなだけ笑えばいいさ。そうしたら君をやつ裂きにしても、ドーリルは怒らない。大丈夫だよ。商品としては駄目にならないようにちゃんと加減はするし、捌く手間も省けて一石二鳥」

「……けものがた？」

スノウは意味を理解できず、首をかしげる。狼は牙を見せて唸った。

「さっさと戻れ。ボクを怒らせたいのか」

「……ここは、どこ？」

「質問できる立場だと思ってる？」

スノウは威嚇する狼に構わず、続ける。

「ここは、わたしにもよくないけど、あなたにもよくないでしょう。いどうしたほうが、いい」

狼は鼻で笑った。

「そんなのは分かってるよ。だからここにしたんだ。ここなら誰も寄って来ないからね。ドーリルも冴えてる」

「……からだを、わるくするかも　しれないのに？」

「大丈夫だよ。ボクたちはビニールで身体を覆っているから、そんなの関係ないもんね。　普段は抜けてるけど、今回はすごい冴えてると思わない？　これ考えたのボクの相棒なんだよ。すごいよね」

「……………」

狼の毛が不自然なのは、ビニールで身体を覆っている所為のようだ。狼は自身の身体を示し、誇らしげに笑う。

「それでね、ドーリルはすごい良い奴なんだよ。機械型で人の形をしているけど、人の形をしていないボクの事を変な目で見ないんだ。そんな人、ボク、初めて見たんだよ。それでね、こういう商売して

るんだけどね、他の奴等みたいに乱暴したりしないんだよ？“危なくなったら速攻、逃げる！これ常識！”って、すごい堂々としてるんだ。憧れちゃうよね」

「……………」

「なんだよ、さっきから黙って。……そうか、ボクのドーリルに恐れをなしたんだな！それは仕方ないよ。ドーリルはすごいからね」
再び狼の自慢が始まる。

「でね、ドーリルはね」

「……………」

「それでね、その時のドーリルは本当に痺^{しび}れたね。こう、顔をキリツと決めてさ“命あつての商売なんだ。いざという時には切り捨てるのも大切なんだ”って。カー！痺れるー！」

そこで狼は不意に言葉を止める。

「なんで笑ってるのさ」

「？」

スノウは口元を手で触ると、わずかに口の端が上がっていた。

「……そうか、分かったぞ！ドーリルのカツコよさに、お前も憧れたんだな！？」

「ちがう」

スノウは即座に否定すると、狼は硬直した。

「あなたもドーリルも、おたがいが大切なんだね」

スノウは笑みを浮かべる。狼は誇らしげに胸を張った。

「そうだよ！獣型は成りそこないだって言われるけど、ドーリルは全く気にしないんだ。だからボクもドーリルのために頑張ってるんだよ」

「それで、なんでわたしはここにいるの？」

スノウはようやく本題を切り出す事が出来て安堵する。狼はにやり、と笑う。

「当然、売るためなんだよ！ちなみに、ばら売りだから覚悟して

ね。痛くはないけど、気分的に嫌なものだから」

「……………」

スノウが沈黙していると、どこからか間の抜けた声が外から聞こえた。

「おい、カルー。売り手がついたぞー。しばらくしたら、すぐ来るだろうから今の内に退却するぞー」

「はい」

狼は無邪気に返事をする、スノウに背を向けて歩き出す。

「ボクたちの商売はここまで。買い取り手がすぐ来るだろうから、逃げるよりも隠れた方が懸命だよ。それじゃ、命がけの鬼ごっこ、頑張ってねー」

狼は楽しそうに尻尾を振って、スノウを置いていった。

1 - 6 水晶

スノウはしばらく呆然と狼を見送っていたが、聞こえてくる足音に状況を思い出す。

（とりあえず、逃げないと）

スノウは周囲を見回すが、今いる広間のような空間に隠れ場所となるような所はない。そもそも聞こえてくる足音は複数だ。ここを風潰しふうみつぶに探されてしまえば逃げ場はない。

そんな時、地下へと続く階段を発見した。スノウは駆け出し、急いで階段を下っていく。再び視界が暗闇に染められるが、視界が馴染むのを待たずにそのまま進む。

初めはまっすぐに進んでいた。しかし、それではすぐに見つかる可能性がある。スノウは適当に割り抜かれた壁を曲がり、走っていく。足音が地下に反響するが、そんな事に構っていらなかった。どれだけ曲がっても、似たような造りが延々と続いている。その事がスノウに更なる焦燥感を募らせた。

走っても走っても変わらない風景。その内、スノウはどこに向かって走っているのか、全く分からなくなってしまった。

（まるで迷路みたい。迷路は苦手なのにな……）

スノウは適当に走りながら、そんな暢気な事を考える。

「いたぞ！ こっちだ！」

その怒声に、スノウは現実に戻った。

振り返ると、見た事のない人がスノウを追いかけている。相手の顔は確認しなかった。そんな事をしているはずを追いつかれてしまふ。人型は他の種族よりも走るのが遅い訳ではないが、スノウの足はあまり早くない。

スノウは思考を振り払う。そこからは何も考えずに無我夢中で走った。適当に曲がり、相手の視界から逃れる。しかし、すぐに見つかってしまう。それでもスノウは諦めずに走る。運の良い事に、こ

の身体は疲れ知らずだ。相手もそうだが、それだけは救いと思えるしかない。

スノウが曲がると、そこは行き止まりだった。運が悪いと思いつつも、これまで行き止まりに行き着かなかっただけでも十分運が良いと考える事にする。そう思った所で状況は変わらないが、そう思った方が精神的に楽だった。

「……………」

スノウは壁に違和感を覚えた。違和感のする壁に近付き、壁が平らではない事に気付く。この建物は泥を固めたブロック状の物を組み合わせて作られているが、それらは規則的に並べられ、材質こそは変わっているが普通の建物なのだ。それなのに、この壁だけ不格好になっている。衝撃を与えれば崩せそうだった。

「見つけたぞ！」

スノウは覚悟を決め、その壁に体当たりをする。壁を成していたブロックがずれ、壁が崩落した。突如溢れた光りに反射的に目を瞑る。

「うわ、なんだ!？」

「なんだ、ここは！ 目が潰れる！」

追いかけていた者たちが、反射的に来た道を引き返していく。スノウは体当たりをしたまま倒れ込んでしまったので、同じように逃げる事は出来なかった。

しばらく目を閉じていたが、なにも起こらない事を知り、スノウは恐る恐る目を開ける。

その空間は緑に溢れていた。木々は光りを燦々と受け、緑の葉が生き生きと萌えている。中央には平たい台があり、そこから絶え間なく水が溢れ、スノウの所まで流れていた。台の上には大きな水晶。一言で表すならば、そこは異様な光景だった。

この世界は常に闇に包まれている。そこに星が常に輝き、地上を照らしているのだ。それ以外の光りとなれば、火か電灯かに限られている。火はそれこそ大災害になる可能性があるので禁止されている。

た。そのため、室内を照らすための手段は電灯に限られる。しかし、この空間の光りは電灯では決して有り得ない輝きをしていた。

「ここは……」

スノウは上に乗っていたブロックを落としながら立ち上がり、周囲を見回す。壁には蔦が這っているためか、スノウが破壊した壁の部分が異彩を放っている。スノウが破壊した壁を見ると、これは現実なのだ、と実感できた。

「……たすかった……のかな？」

しかし来た道に戻る気はしない。まだ戻るには危険な気がした。スノウは中央にある水晶に近寄る。周囲を確認しながらも、スノウの意識は先程からこの水晶に注がれていた。

（綺麗。だけど、なんだか怖い……でも、触りたい）

スノウは恐る恐る手を伸ばす。手は震えていた。震える理由は、心当たりが多すぎて分らない。

スノウの手が水晶に触れようとしていた。

「駄目だ！ スノウ、そいつに触るな！」

突然呼ばれ、スノウは身体を震わせる。その拍子にスノウの手は水晶に触れてしまった。

仕上げが終わった時、クラウドの声が響いた。

「おい、一体どうしたってんだ？」

アクセルは湾曲刀の背で肩を叩きつつ、クラウドの元へと歩く。スノウの身体を狙っていた連中は、クラウドとアクセルがほとんど壊していた。誰かが来ない限り、彼らは動く事もままならないだろう。

クラウドの元へ来たアクセルは、その光景に目を奪われた。

「こ……ここは、一体……」

しかしクラウドは逆に顔を顰めている。

「最悪だ」

クラウドの言葉に、アクセルは我に返った。クラウドの視線の先

を追う。

「スノウ！」

アクセルは駆け出す。

水晶の置かれている台の傍で、スノウは倒れていた。身体は水に濡れ、濡れていない部分にしても埃まみれだった。

「そんな切羽詰まったような声なんか出さなくても平気だったの。ちよいと気絶してるだけだから」

「どういう事だ」

アクセルはクラウドを睨みつける。クラウドはスノウの傍に身を屈め、スノウを肩に担ぐ。

「とりあえず、ここを出るのが先だ。違うか？」

アクセルは自身の属性を思い出し、舌打ちをする。クラウドは嘆息した。

「そんなに焦らなくても、大丈夫だ。……本当に大変なのは、これからだしな」

アクセルがその言葉を実感するのは、ずっと先の事だった。

1 - 7 始まりの夢

急げ、急げ！

なにかに急ぎ立てられるかのように、その小さな生き物は走る。

（……なんで、こんなに急いでるんだっけ？）

そんな事はどうでもいい！

私は、あの人を救わないと。助けないと！

（あの人って……誰？）

急ぎ立てるような焦燥感とは逆に、妙に冷えた部分を持つ自分に驚いた。

急がないと！ 早く早く！

手遅れにならない内に！

（だから、なにをそんなに急いでいるの？）

*

「おかあさん、アレかってよ」

四歳ほどの小さな子どもが母の手を引きながら指で示す。

「だめよ。私たちのマンションはペット禁止なの。諦めなさい」

母親は子どもと目線を合わせ、優しく諭す。しかし子どもはそれを拒絶するように首を振った。

「いやいやいや。ほしいよ、おかあさん かってよ」

子どもは全身を使って駄々をこね始める。周囲にいた買い物客たちが何事か、とその親子に視線を向けた。母親は衆目の目を気にせ

ず、落ち着いて続ける。

「だめよ、ちゃん。こればかりは、どうしようもないのよ。我慢しなさい、ね？　ちゃんが、もっと大きくなったら飼おうね。」

「……そうだ」

母親は何かを思いついたかのように子どもの手を引いて歩く。子どもは名残惜しそうに後ろを見ながらも、母親の後についていった。母親は一つの箱を持ち上げ、子どもに見せる。

「これなんか、どう？　あの子とそっくりでしょ。これなら買ってあげれるわ」

子どもは箱の中を凝視し、母親を見上げた。

「ぜんぜんちがうよ！　あの子の方がずっと、ずっとかわいいよ！　それにこれは、うごかないよ」

「そうかしら。確かに動かないけど、とってもとっても可愛いわよ？」

「かわいいけど、ちがうの！」

子どもは背を向け、先程の動物がいた場所へと走っていく。ガラスのケースにへばり付き、中にいる動物をキラキラした目で見つめていた。

「……あれくらいの子なら、これでも大丈夫だと思ったんだけど」

母親は軽く溜息をついて箱を元の場所へと戻す。子どもの背から、ガラスケースの中を覗き込んだ。

「おかあさん！　やっぱりこの子の方が、ずっとかわいいよ」

「はいはい。そんなに大きな声を出すと、その子が驚いちゃうわよ。しー、ね」

母親は口元に指をあて、子どもを見た。すると、子どもの方も母親の真似をする。

「しー。うん、驚いちゃうもんね。驚かせてごめんね」

すると中の動物が何かしたのか、子どもが小さな声で歓声を上げていた。はしゃぐ子どもを母親は苦笑いを浮かべて見ている。

今日は寒い日らしい。通る人々は皆、服を着込んでいつもよりも一回りほど大きく見えた。

「これ、ください」

先日の子どもの母親だった。店員は愛想のよい笑みを浮かべ、差し出された物を包装していく。今日は特別な日らしく、包装の紙が洒落^{しゃれ}た物だった。

「ありがとうございます」

母親は受け取り、家へと向かう。

「喜んでくれるといいけど……」

母親の呟きを聞く者はいない。母親は家の扉を開け、中へと入って行った。おかえり、と子どもが走って母親を迎える。弾んだ声。子どもは何かを母親に期待している様だった。

「ケーキ、かってきた？」

「ええ、買ってきたわよ。ほら」

母親は袋を示す。子どもはケーキの袋を受け取ろうとするが、母親が不安そうに聞く。

「大丈夫？ 落したり、ぶついたりしたら大変な事になるからね。気を付けるのよ」

「だいじょうぶー」

子どもは走って冷蔵庫へと向かっていった。途中の角で袋を軽くぶつけていたが、子どもは喜びのあまり気付いていない。母親はそれを落ち着かない様子で見守っていた。

子どもは両親といつもより豪華な夕食を食べ、はしゃいでいた。時折聞こえてくる言葉から推測するに、今日はクリスマスという日らしい。クリスマスにはサンタサンが来て、子どもが寝ている間にプレゼントを枕元に置くそうだ。会話の様子から、両親はサンタサンを知っている様だった。会話の端々からそんな印象を受ける。

「良い子にしてないとサンタさんが来ないよ」や「サンタさんは

の欲しい物をくれるんだろうけど、サンタさんはちょっと歳だからお家を間違えちゃうかもね」がその筆頭だった。その度に子どもは反論するが、良いようにあしらわれている。

「さあ、そろそろ寝なさい」

母親が眠そうに眼を擦る^{こす}子どもをベッドへと誘導していく。子どもは横になるとすぐに寝入った。母親は微笑みを浮かべ、子どもの頭を撫で、布団を被^{かぶ}せて部屋を出ていく。

しばらくして、母親は先程の箱を持って現れた。それをそっと、子どもの枕元に置く。

こうして夜は何事もなく過ぎて行つた。

朝になり、子どもは枕元に置かれている、包装された箱に気が付いた。子どもは包装紙を適当に剥がしていく。そうして現れた物に、子どもは目に見えて落胆した。

「……だから、ちがうのに」

1 - 8 流れ星

スノウが目を覚ますと高い天井が見えた。起き上がり、周囲を見回すとスノウは本棚に囲まれている事に気が付く。見覚えのある場所だった。

「目が覚めたか」

アクセルは寄りかかっていた壁から離れ、スノウに近付く。

「リブランに仮眠室を借りた。宿を借りても良かったんだが、目立ち過ぎるからな」

「クラウドは？」

スノウはクラウドがいない事に首をかしげる。

「さあな。散歩でもしてるんじゃないか？ そんなことより、身体は大丈夫か？ 外傷がないことは一応確認したが、気分が悪かったり、何かに気付いたら言うといい」

スノウは立ち上がって身体を動かし、確認した。

「……ふぐあいは ないよ」

「なら、いい」

「どこに行くの？」

背を向けて歩き出そうとするアクセルに、スノウは尋ねる。

「散歩だ。ついでにクラウドを探してスノウが起きた事を知らせてくる」

「わたしも行く」

「まだ安静にしていた方が良さと思うが……」

スノウは気にせず、アクセルの後ろをついて行く。アクセルはしばらくスノウを見ていたが、何かを諦めたように溜息をついた。

外に出ると変わらず空は暗く、星が瞬いている。時折、星が流れるのをスノウは不思議そうに眺めた。

「ながれぼし」

スノウは空を指差す。

「珍しくもなんともないだろう。ここでなくとも、常にどこかで星は流れている」

「そうなの？」

「ああ。常識だ」

スノウは再び空を見上げた。スノウはふと、奇妙な話を思い出す。ながればしが 流れているあいだに、三回おねがいをとええるとそれが叶うんだって」

「そんな話は初めて聞く。だが、だとしたら随分な大盤振る舞いだな」

「なんで？」

「どこかで必ず星は流れている。だとしたら、願い事は叶え放題だ」スノウは微笑んだ。

「なら、みんな幸せになれるね」

「……さあな」

クラウドは広場にいた。噴水の縁^{へり}に座り、星空を見上げている。

「こんな所にいたのか」

アクセルが声をかけると、クラウドはアクセルに向かってにやり、と笑う。

「ちょうど良い所に来たな」

「なんだ？ 厄介事をご免だぞ」

「つれないねえ、とクラウドは立ち上がる。

「ほらよ」

クラウドは手に持っていた物をアクセルに投げ渡した。アクセルは受け取ったものを訝しげに見る。スノウもアクセルの手元を覗き込み、アクセルの腰に差してある湾曲刀と見比べた。

「アクセルのと おなじだね」

アクセルはクラウドを睨みつける。

「なぜお前が湾曲刀を持っている。それに、お前の得物はどうした」
「そいつだよ」

クラウドの背に背負っているはずの剣はない。しかし同じ剣として渡されたのは全く種類の違う物だ。一体、どのように変形させたというのか。

「時間ギリギリだったからな。お前に届けられないんじゃないかと冷や冷やしてたぜ。大切に扱えよ。俺の愛剣だったんだからよ」

「話が見えない」

アクセルは目を細める。クラウドは細かい事は気にするな、と笑った。

「なあ、アクセル」

「なんだ」

クラウドは空を見上げる。アクセルもつられて空を見上げた。

「この星が何なのか、気になった事ないか？」

「気になるも何も、気が付いたらそこにあった。それ以上でもそれ以下でもない」

「分かりにくい奴だ」

アクセルは星の事なんてどうでも良かった。深く考えたことなどない。クラウドはぼつり、と呟いた。

「この星はな、願いの数だ」

「願い？」

先程のスノウのような話だろうか、とアクセルは考える。

「星が流れている間に三回、願い事を唱えると叶うというものか？それなら先程スノウから聞いたが」

クラウドは目を丸め、次いで大きな声を上げて笑った。スノウは首をかしげる。

「なんだそれは。随分と簡単な叶え方だな。ほんと、そんな簡単に叶えられたら良かったのにな」

「どうしたんだ、クラウド。なんか常にも増して、変だ。変な物でも拾い食いしたか？」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ」

クラウドはアクセルに呆れたような視線を投げた。アクセルは心

外だ、という風に目を細める。

「まあ、いい。俺はここで終わりだからな」

「話が見えない」

「じゃあ、最後のヒントだ」

クラウドはにやり、と笑う。その笑みはどこか悲しげだった。

「この星たちは、願いの数であり 命の数だ」

スノウはクラウドの言葉に首をかしげている。アクセルは眉を顰めた。

「意味がわからない」

「今に分かる」

クラウドは苦笑いをする。クラウドはスノウに近寄り、頭を撫でた。

「お前さんにはもつと色々教えてやりたかったな。まあ、俺の事なんて忘れちまうだろうけどな」

「？ わすれないよ。わたしは、わすれない」

「そうか。だが、期待はしてない。アクセル、スノウが俺の事を覚えていなくても責めるなよ」

クラウドはスノウの頭から手を離れた。

「スノウは忘れない、と言っているだろう。なぜ、そんな事を言う」それが、この世界のルールだからさ」

不意に、クラウドの身体から小さな光りが舞い上がる。粒子のような小さな光りは、クラウドの身体中から溢れていた。

スノウはきれい、と呟くが、クラウドは肩をすくめている。

「きれい、か。皮肉だな。まあ、良いけどよ」

「どうしたんだ？ 新手の芸か？」

アクセルは困惑して、訳の分からない事を口走っていた。

「そんな良いモンでもないさ。まあ、俺も初めて見た時は驚いたしその間にも光りはクラウドの身体から、止まる事なく溢れ出る。」

次第にクラウドの身体の輪郭が曖昧になってきた。

「“スターダスト現象”。そう呼ばれてるらしいな。まあ、俺らに

したら上等な最期だ」

「何を言っている」

クラウドの身体から溢れる光りはとどまる事を知らない。スノウはそれと同時に、自分の中から何かが消えていくのを感じていた。

「……クラウド」

スノウはクラウドに触ろうとしたが、その手はクラウドの身体をすり抜ける。スノウは不思議そうに自身の手を見つめた。

クラウドは苦笑する。

「こうなったら、誰にも止める事はできないのさ。……しかし、最期を看取ってもらえるのは、なかなか気分がいいな。おまけに、一人は俺の事を忘れない。アクセルにしてみたら大迷惑だろうがな」
クラウドの身体はもはや存在しない。光りの塊がそこにあるだけ。
「クラウド、いい加減にしろ！ 話が見えない！」
アクセルがクラウドを掴もうとするが、やはりその手もすり抜ける。

お前と一緒にいるのは、案外楽しかったぜ。

クラウドは光りに溶けた。その光りも、すぐに消えていく。まるで何もなかったかのように。

アクセルは呆然と手を伸ばしたまま固まっていた。スノウはそんなアクセルは不思議そうに見つめてる。

空の星が、ひとつ流れた。

1 - 8 流れ星（後書き）

ここでもうやく第一章は終わりです。次は幕間が入ります。
そしてこの話からもうやくスノウの言葉に漢字が混ざるようにな
ります。……長かった。

スノウの第一章での精神年齢は小学生低学年くらいです。漢字の
チョイスは適当です。低学年で習う漢字とか関係ありません。

幕間（前書き）

ようやくマーティ登場。 獏はわりと好きなキャラです。

幕間

その空間は暗闇の中に存在していた。

その空間には不自然にドーナツ状の円卓が存在している。その円卓は座席が四つしかなく、なおかつ、その一つは埋まっていた。

「すーすー……」

その座席の主は心地よさそうに、机に突っ伏して惰眠を貪^{むさぼ}っている。空間に穴を開けてやって来たリブランは、その様子を見て呆れた。

「……いつものように、ほとんど集まっていないのはいいとして。なぜあなたはこんな所で眠っているのですか、猯^{ばく}」

リブランは猯に近寄り、身体を揺する。猯は後もう少し、と寝言を唱えた。

「………まともな人が欲しいですよ、本当に」

「おやおや、リブランさん。猯さん。お集まりですか？」

紳士服に身を包んだ男　ジルがどこからともなく現れる。リブランは嫌な奴が来た、と内心眉を顰めつつ、にこやかに答えた。

「ええ。あちらは時間という概念がありませんから、遅刻しないように来たんですよ」

ジルは納得したようだ。足りない人員を探して首を巡らす。

「まだマーティは来ていないようですね」

「あの人に時間を守れ、というのが難しい事です。違いますか」

ジルは苦笑いを浮かべた。

「そうかもしれませんね」

リブランは自身の座席へと着く。猯を横目で見るが、まだ眠っていた。

「猯さん。そろそろ時間になります。お目覚めください」

ジルの言葉に猯は、目を閉じたまま起き上がる。

「むー……もう、そんな時間なんだな」

やたらと間延びした声。かと思えば、未だに夢の中にいるのではないかと邪推してしまうようだ。しかし、獏は普段からこの状態である。これが起きている状態なのだ。

「ええ、時間です。マーティは遅刻ですね」

「はいはいはい。遅刻じゃないよー！ギリギリセーフ！」

空席近くの空間が歪み、元気よく小柄な人物が現れる。

「ういーっす」

片手を上げて笑顔を振りまく人物こそ、マーティである。

マーティは勢いよく座席に座った。そしてジルを睨みつける。

「セーフ、でしょ？」

ジルは苦笑いする。

「そうしておきますか。次からは許しませんよ」

「はい」

このやりとりも何度目になるか分からない。それほど頻繁にマーティは遅刻するのだ。

「では、会議を始めます」

「で、なにすんの？」

ジルの言葉を遮るようにマーティが声を上げる。リブランは相変わらずの破天荒な様子に呆れた。

「マーティ、少しは人の話を聞いた方が良いですよ」

「人じゃないけどね」

ジルは軽く咳払いをする。二人は口を嚙み、獏は漕いでいた船を止めた。

「さて、今回皆さんをお呼びしたのは他でもなく、あの娘に関してでございます」

「あの娘……スノウの事ですね」

ジルは頷く。

「誰、それ」

マーティは目を細める。

「彼女の存在は、少タイレギュラーでしてね。難易度を上げる必要

があるのですよ」

その言葉にマーティは目を丸めた。

「珍しい。ちゃんと参加してるんだ。最近ではそういう奴等、ぐつと減っちゃったからね。久しぶりにはっちゃけたいし、いいんじゃないの？」

「……………」

リブランはマーティを無言で眺める。ジルは知ってか知らずか
いや、知っているだろう。ジルはマーティに爆弾を落とす。

「彼女、限りなく人に近い姿をしているのですよ」

マーティの肩がびく、と震えた。へえ、とマーティは顔を歪める。

「限りなく人に近い、ね。愛されてたんだ？」

「そのようですね。愛情の深さに比例しますから」

「嫌い」

マーティは呟く。

「そんな奴、大嫌い。大嫌い大嫌い大嫌い。ねえ、そいつ。ぐちゃぐちゃにしてもいいよね？ いいんでしょ？」

マーティは子供が面白い悪戯を思いついたかのような、笑みを浮かべていた。だが、そこにあるのは深い憎悪。

「あなたが直接、手を下す事は禁止されています。ご存知ですよね」
「知ってるよー。だから、そうするように、周りを誘導するだけ。」

難易度も自然に上がるし、良い事づくしじゃん？」

「……………」

リブランは無言を貫く。獏は眠そうに眉を擦こすっていた。

「好きにしても良いとお達しです。マーティ、あなたの権限を超えない範囲で好きになさい」

マーティはにやり、と笑う。

「りょーかい。じゃあ、早速仕込みをしなきゃね。それじゃねー、ばいばい」

マーティは暗闇に溶けて消えた。

リブランはしばらくその闇を凝視し、大きな溜息をつく。

「なぜ彼女を走らせるのです。あれではスノウが壊れてしましますよ」

「構いません。彼女は通過地点を通り過ぎれば、確実に叶える事が出来るのですから」

スノウにとって、最期の問題は簡単すぎるのだ。

「記憶、ですね。それは分かりますが、マーティが異様に張り切っています。越権行為に及ぶやもしれません」

「構いませんよ。そうなれば処分するだけですから」

リブランはジルの言葉に眉を顰める。

彼にとってはリブランも、マーティも、獏もただの駒。箱庭を運営するために必要なただの駒なのだ。

「マーティ自身も忘れているでしょうが、マーティも十分この世界にとつては異分子なのです。排除できる理由が出来ればそれもよしと考えています」

「それは、上からのお達しですか？」

「いいえ、ワタシの独断ですよ。我を忘れて暴走するような駒はいりません。マーティも十分知っているはずですから、問題はありませんよ」

リブランは居心地の悪さを覚え、闇に溶けてその場を去った。

2 - 1 忘却（前書き）

第二章スタート

2 - 1 忘却

アクセルは呆然と、正面を見つめていた。アクセルの背はスノウよりも頭ひとつ分ほど大きい。なので、スノウは自然とアクセルを見上げる形となる。

スノウはアクセルが動かないのを不思議そうに見つめていた。

「どうしたの」

スノウはアクセルの視線の先に目を向ける。しかしアクセルの視線の先に何も無い。スノウには、なぜアクセルが呆然としているのか分からなかった。

「……なぜ、クラウドは消えたんだ」

独白のような言葉にスノウは首をかしげる。

「クラウド？」

「ああ。光りになって、消えちゃった……」

「？」

不思議そうに首をかしげるスノウの様子を見て、アクセルはクラウドの言葉を思い出した。

『スノウが俺の事を覚えていなくても責めるなよ』

アクセルはまさか、と思う。そんなはずがない、と即座に否定する。しかし疑念は消えない。アクセルはスノウを見た。

「なあ、スノウ。クラウドって覚えているか？」

「だあれ」

スノウは首をかしげる。

「大柄な、白い虎だ。やたらと声がかくて、勝手に人の頭を叩いて、よく笑ってた。……本当に覚えていないのか？」

「わかんない」

スノウは首を横に振った。

「お前を見つけたのも、クラウドだ。オレは最初、放っておこうと思っていたんだ。けれど、クラウドがスノウを拾った。オレは厄介

事はご免だと言ったのに」

スノウの反応は変わらない。

「なあ、本当に覚えていないのか、スノウ」

アクセルはスノウと視線を合わせる。しかし、スノウは首を振った。

「知らない。わたしは、アクセルに拾われた。その時、ほかにはダレもいなかった」

アクセルは信じられなかった。いや、信じたくなかった。

スノウをリブランに預け、アクセルは町の人々に訪ねまわる。しかし、結果は全員同じ。クラウドの事を誰も覚えていなかった。かつて、クラウドと共に呼ばれ続けた異名も、今やアクセル一人だけの物になっている。

（どういう事だ）

アクセルの心に焦りが積もっていく。

（なぜ、誰もクラウドの事を覚えていない！）

『それが、この世界のルールだからさ』

クラウドの言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。

リブランの元へ戻った時、クラウドの存在が見えない何かによって痕跡すら消された事を、アクセルは納得せざる負えなかった。

「ようやくお帰りですか」

「ああ……なあ、お前も本当にクラウドの事を覚えていないのか？」
アクセルは駄目元でリブランに尋ねる。希望は持っていなかった。ただの確認作業だ。

「さて、それは一体どなたの事でしょうか？」

「……いや、いい」

少なくとも、この町でクラウドの事を覚えているのは、アクセルしかいなかった。

アクセルは本の敷き詰められた棚の奥へと進み、スノウを見つめる。スノウは机に本を広げ、椅子に座った状態で眠っていた。

「彼女はお休み中そうですね。あなたも疲れが溜まっているではありませんか？」

「冗談はいらん。オレたちは疲れない。スノウは規格外だ」
リブランは微笑みを浮かべる。

「……あなたは時折、本当の姿を見破る。本当に恐ろしい方です」

アクセルは怪訝そうにリブランを見た。

「何を言っている。分かりやすい言葉で話せ」

「それは出来ませんね」

リブランは微笑みを浮かべる。アクセルはその笑みを信用できなかった。

「アクセル、帰ってきたの？」

スノウは目を擦りながら、アクセルを見上げる。アクセルはリブランを睨んだ後、溜息をついた。

「ああ。スノウ、お前はリブランの世話になるといい」

リブランは目を丸める。アクセルはリブランが何かを言う前に押し留めた。

「スノウが自立できるまでで良い。そんなに時間は掛からないはずだ」

「なんで？」

スノウは首をかしげる。

「オレは、この町を出るからだ」

町の外ならば、クラウドの事を覚えている人がいるかもしれない。だが同時に、それが有り得ない事だと理解していた。アクセルは悪足掻きだと自覚している。そんな不毛な旅の為に、スノウを連れ歩くわけにはいかなかった。

「それなら大丈夫」

スノウは椅子から立ち上がり、アクセルの目の前まで歩く。

「わたしも、行かないといけない」

「……なにを言っている」

「行かないといけないの。行かないと、わたしはきっと、後悔する。」

だから、行く」

アクセルはこの時になって、ようやくスノウの様子が変わった事に気付いた。今まではどこか稚拙な所があったが、今は明確な目的を持って進もうとしている。

「行ってくて、どこにいくつもりだ？」

スノウは肩を落とす。

「わからない」

「わからないって……」

アクセルは脱力した。スノウが成長したように思えたが、やはり変わっていないようだ。

「でも、行かないといけない。行かないと」

スノウは熱に浮かされたように呟き続ける。

「まだ、まだ大丈夫……でも、行かないと。急がないと………わたし、なにをこんなに焦っているの………？」

アクセルはスノウに声をかけようとしたが、それはリブランの言葉に遮られた。

「まあまあ、このままスノウを私の元に置いておいても遅からず、飛び出してしまうでしょう。そうになると、外は彼女にとって危険がいっぱいです。ただでさえ珍しい人型をしているのに、常識も知らないと知られば、恰好の獲物になってしまいますよ。」

それくらいでしたら、アクセル。あなたが連れていくと良い。あなたも安心、スノウも安全。完璧です」

「お前も厄介者を受け入れなくて済む」

「分かっていただければ、結構です」

アクセルはスノウを見つめた。スノウもアクセルを真っ直ぐ見返す。しばらくして、アクセルは肩を落とした。

「好きにしろ」

スノウは無邪気な笑みを浮かべる。

「ありがとう」

2 - 2 砂漠越え（前書き）

本当は一時間前には書き終えたはずなのに、なぜか半分しか保存されていなかったため、書き直しました。思い出しながら書こうとしましたが、後半は少し内容が変わってしまいました。なるべく最初に近づけようとしたのですが、無理でした。すみません。

2 - 2 砂漠越え

二人はすぐに煉瓦の町を出た。

この世界では街道というものが存在しない。その代わりに列車が通っている。時間の概念のないため、この世界には時刻表などは存在しない。そのため、歩いて移動するのが普通である。気まぐれに現れる列車を利用する人は少ないのだ。

スノウは町の外に広がる一面の砂漠を見て、若干身を引いた。ワタ属であるスノウは、埃と砂を本能的に嫌う。一度、身体に砂が付くと、なかなか落ちないのである。

歩き出そうとしないスノウをアクセルは怪訝そうに見た。

「どうした。町に帰るのか」

「……列車、待たないの？」

「^{すが}……列車、待たないの？」
縫うようなスノウの視線を受け、アクセルは事情を察する。だがアクセルは、いつ来るかも分からない列車を待つつもりはなかった。「列車はいつ来るかは分らん。そんな物を待っているだけ無駄だ。それくらいだったら、自分で歩いた方がマシだ」

「アクセルは、何属？」

アクセルは眉を顰める。

「それを聞くのはマナー違反だ。隠すのが普通だ」

属性によって特性が変わる為^{ため}である。強みになる場合もあるが、弱点として突かれる事が多い。無暗に教えるのは危険な行為なのだ。

「……そうなの？」

「常識だ」

スノウは沈黙した。

「お前の場合は特に気を付けた方がいい。人型の上にワタ属だったりしたら、目も当てられない」

「……………」

「さっさと行くぞ」

アクセルは線路沿いに歩き始める。スノウも恐る恐るながらも砂の上を歩き始めた。

スノウには、どれくらい進んだのか全く分からなかった。後ろを振り返っても、見えるのは一面の砂漠。そしてどこまでも続く線路だけである。空には変わらず満天の星が瞬いていた。

（星座があればいいのに）

そうしたら方角が分かる。

そこまで思っ、スノウは首を傾げた。

（星座って、なんだろう？）

「考え事をしながら歩いていると、転ぶぞ」

不意に声をかけられたスノウは、砂に足を取られて盛大に転んだ。アクセルはそれを呆れたように見ている。

「上ばかり見ながら歩いているからだ」

スノウは素早く立ち上がり、砂を急いで叩き落とす。しかし、何かが身体に纏わりついているような異物感は消えなかった。

スノウは顔を悲しげに歪める。

「……砂、きらい」

「好きな奴の方が珍しいだろ」

アクセルはスノウの様子に呆れながらも、スノウが変わった事を感じていた。

（成長、しているのか？）

スノウの使う語彙ごいが増えている。今まではあまり喋らなかった所でもあるが、感情を表す事も少なかった。だが、今でははっきりと感情を表している。

思い返してみれば、クラウドを探しに行く時も、置いて行こうとしたにも関わらずついて来た。町を出る時にいたっては、強引にアクセルについて来たのだ。スノウは自己を主張するようになっていく。だが、それは必ずしも良い事ばかりではない。

「そんなに歩くのが嫌なら、ここで列車が来るまで待っていると良

い」

「いや」

「列車に乗るのはそれほど難しくない。もっとも、止まってくれないからコツが必要だが」

「いや」

スノウは首を振って、拒絶する。アクセルはスノウを見て、大きく息を吐いた。

「スノウ。別に無理をしてまで、オレについて来る必要はない。嫌ならついて来なくても良いんだ。むしろ、なんでオレについて来る」
スノウは目を丸め、顔を逸らす。

「なんで……」

「？」

アクセルは首を傾げる。

しばらく俯うつむいていたかと思えば、スノウは唐突にアクセルに背を向けて走り出した。アクセルは啞然とスノウの背中を見ていたが、スノウが線路から逸れているのに気付く。

「待て！ スノウ、線路から離れるな！ スノウ！」

アクセルは線路とスノウを見比べていたが、覚悟を決めて走り出した。

スノウは無我夢中で走った。

（なんで？　なんで、あんな事を言うの？）

スノウはアクセルの悲しげな表情を見てから、アクセルにずっとついて行くと決めたのだ。

しかし、スノウが「クラウド」を知らないと知った時から、アクセルの様子はおかしかった。アクセルはずっと悲しそうな顔をしているのに、アクセルはその事に気付いていない。

（私が「クラウド」の事を覚えていないから？）

スノウは「クラウド」という人物に会った事がない。そもそも、アクセルに拾われてから、ずっとアクセルと一緒にいるのだ。アク

セルもスノウが「クラウド」に会った事がないのは知っているはずである。

（クラウドって……だれ？）

スノウは走り出した時と同じように、唐突に立ち止まった。周囲を見回したが、砂しか見えない。スノウはその事に恐怖を覚えた。足元にある自身の足跡を辿り、線路まで戻ろうとするが、足跡は途中で消えている。顔を上げて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「どうしよう」

スノウの声を聞く者は、いなかった。

2 - 3 感傷

スノウは途方に暮れていた。とりあえず、足跡の先に真っ直ぐ進んでみようと思い立つ。しかし、どれだけ歩いても見えるのは砂ばかり。スノウは自身が本当に前に進んでいるのか不安に駆られた。

自分は本当に真っ直ぐに歩けているのだろうか。本当は逆方向に向かっている、とどんどん道から離れて行っているのではないか。

そう考えて、スノウは泣きなくなった。けれど、涙なんて出るはずがない。仕方なく、スノウは空を見上げた。

多くの星が不規則に並んでいる空。理由は分からないが、スノウはそれが不自然に思える。何も考えずに空を見上げていると、星が一つ、流れた。そこでスノウは既視感きしかんを覚える。

（私は、星が流れるのを、前に見ている？）

スノウは初めて流れ星を見たと思ったのだが、そうではないようだ。だが、記憶にない。勘違いだろうと、自分を納得させた。

スノウは再び砂漠を当てもなく漂う事にする。適当に歩いていれば、その内線路が見つかるかも知れない、という楽観的な考えに基づいての行動だった。しかし、心の中ではその場に留まり続けているのが怖かったのだと、理解している。

しばらく歩いた頃だった。スノウは砂を踏む感触が変わった事に気付く。首をかしげて足元の砂を避けると、煉瓦のような石で道が舗装ほそうされている事に気付いた。このまま歩いて行けば、どこかに辿りつく事が出来るだろう、とスノウは考える。

その時だった。背後から砂を踏む音が聞こえ、スノウはそちらに視線を向ける。

そこには甲冑に身を包んだ騎士がいた。

その騎士は異様な姿だった。甲冑に身を包んでいるため、種族が分からない。

「汝なんじ、そこで何をしている」

鎧の中で反響した、くぐもった声が聞こえた。敵意は感じられない。スノウは正直に答える事にした。

「道に迷いました」

鎧騎士はそうか、と周囲を見回す。スノウもつられて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「汝は運が良い。よければ線路まで案内する。いかがなさるか」

不思議な言い回しをする人だな、と思いながらもスノウは頷く。

騎士はスノウに頷き返し、背を向けて歩き出した。スノウもその背に無言でついて行く。不思議と、鎧騎士に対して警戒心は持たなかった。

アクセルはスノウが走った方角に向けて進む。スノウの足はそれ程早くはないにも関わらず、アクセルにはスノウの姿すら見つける事が出来なかった。

「くそっ」

アクセルは諦めて、元来た道へと戻る。

この砂漠で迷った者は、二度と帰っては来られない。アクセルは自分が迷う前に引き返す事にした。走った所為で、身体の関節部分に砂が入ったようだ。身体を動かすたびに、身体が軋きしむような音が聞こえる。

アクセルは鉄族だ。例え、砂が身体の中に入ったとしても、すぐに洗い落とせる。その後乾かさなければ、身体が錆さびてしまうのが難点だが、他の種族に比べれば些細さいさいな問題である。

アクセルは再び線路沿いに歩き始めた。スノウの事を考えないように、前を見て歩く。

アクセルには、スノウの行動の意味が分からなかった。そもそもアクセル自体が人の感情の機微きびに疎うとい。はっきりと口に出してくれなければ、アクセルには理解のしようがないのである。要するに、思っている事をなかなか口に出そうとしないスノウとは相性が悪かった。もっとも、アクセル自身はその事に気付いておらず、手のか

かる妹分のように思っている。

アクセルは立ち止まり、周囲を見回す。何もいない事に気付くと、息を吐いて再び歩き始める。しばらく歩いては立ち止まり、またその繰り返し。アクセルはスノウの事を見捨てたが、やはり気にはなっているのである。しかし、探しに行っても見つかる事は不可能であり、逆にアクセルも砂漠の中で迷ってしまう可能性があった。

（なにを気にしている）

アクセルは歩き続ける。

（あれは好きで走って行った。わざわざこちらも、それに付き合う必要はない）

だが、とアクセルは考えてしまう。

スノウはまだ、この世界の事を知らない。そんな人物を、放り出したままで良いのだろうか。アクセルはクラウドに、スノウの事を頼まれたような気がしている。だがクラウド自身、そんな事は口になかった。アクセルの勝手な思い込みである。

（オレは、どうすればいいんだ）

アクセルはクラウドから貰った湾曲刀の柄えを握った。反対側の腰には自身が初めから身に着けていた湾曲刀がある。

「クラウド。お前はオレに何を求めていたんだ」

空を見上げるが、そこにはただ無数の星があるだけだった。似合わない感傷に浸っていた事に気付き、その感傷を振り払うように歩き出す。

しばらくして、アクセルは目を疑った。

そこには甲冑に身を包んだ鎧の騎士と、それに並ぶように立っているスノウがいたのである。

2 - 4 下準備

スノウはアクセルの姿を見つけると、アクセルの元へと駆け出した。

「アクセル」

「スノウ、一体なにをしていた」

アクセルの言葉に、スノウは足を止める。スノウの目はどこか不安そうに揺れていた。

「わ、わたしは……」

「この砂漠は、危険だと言ったはずだ。それとも、分かっているやつたのか？」

「そんなこと、言っていない」

スノウは小さな声で反論する。アクセルはそれを耳聴く、聞いていた。

「だとしても、こんな目印の全くない場所で道を失う事が、どういう事を理解出来なかったとは言わせない」

スノウは口を嚙む。

「それに、別にオレと一緒にに行く必要はどこにもない。そいつと一緒に行けばいいんじゃないか」

スノウは俯いて、首を何度も横に振った。

「いや」

「なぜだ」

アクセルはスノウを睨みつける。スノウは身体を竦めた。

「話は読めないが、我はどちらにしろ、この土地を離れる事は出来ぬ」

鎧の中でくぐもった声が二人に届く。

「我は道に迷っていた者を、気まぐれにここまで帰したまで。普段はそんな事はせぬ。よって、用が終わった我は、ここで失礼させていただきます」

騎士は二人に背を向け、鎧を鳴らしながら去って行った。アクセルはその背に、納得していないような目を向ける。だが、鎧騎士を引き留めはしなかった。

「アクセル……」

スノウは上目でアクセルの様子を窺^{うかが}う。アクセルは大きく息を吐いた。

「わかった。今回は連れて行く事にする。だが、もし次も同じような事があつたら、そのまま置いて行くからな」

「わかった」

スノウは神妙に頷く。アクセルは鼻を鳴らして先へと進んだ。スノウも置いて行かれないよう、横に並んで歩き出した。

＊

鎧騎士は気配を感じて背後を振り返る。だが、そこには誰もいない。果てしなく続く砂と星空があるだけだった。

「……何者」

鎧騎士は低い声で相手を窺うように声を上げる。視線の先にある空間が割れ、勢いよく何かが飛び出した。

「ぱんぱかぱーん！ マーティさん、とうじょーうつ！」

「……………」

無言を貫く鎧騎士に、マーティは不服そうに声を上げる。

「なに睨^みんでんの。あたしの方があんたよりも位が上なんだから、もつと敬^{やうやう}いなさいよ！」

「……位など、関係無かるう。我とて、重要な役目を担^かつておる。そこに貴賤の差は存在せぬ」

マーティは大袈裟に溜息を吐いた。

「あー、もうっ！ 固すぎるよ、あんた！ そんなんだから、こんな辺境に押しやられんのよっ！」

興奮しているマーティに比べ、鎧騎士は冷めている。

「我は構わぬ」

何を言っても大した反応を得られないためか、マーティは疲れたように肩を落とした。

「……あんたと話していると、疲れるわ」

「軟弱な」

「だーっ！ もう、うるさい！ 喋るな、馬鹿騎士！」

マーティに言われ、鎧騎士は沈黙する。

マーティは荒れた息を整えた。

「そんなあんたに朗報だよ。新しい任務を与えてあげる」

碌ろくな事ではないだろうな、と騎士は内心で思う。しかし、位の高いマーティに逆らう事は出来ない。

マーティは騎士の様子に気付いているのかは不明だが、上機嫌に宣告した。

「鎧騎士。あんたに神殿警護の任を一時解き、白い人型を追ってもらう」

「……………」

鎧騎士は口を挟まず、続きを聞く。

「そいつの名はスノウ。本来であれば、獣人型であつたはずの者でも、人型になったせいで、本来備えていたはずの能力は失つてる。それで、任務はそのスノウって奴を壊しちやえばいいの。どう？ とーっても簡単な任務でしょ」

マーティはにつこり、と微笑んだ。

「でも、それだとならないから、あたしなりに趣向を凝らしてみました！ 領主権限？ みたいな物のお陰で、とーっても楽しくなるよー！」

マーティは悪戯を仕掛けた子供のように無邪気な笑みを浮かべる。だが、そこにあるのは深い憎悪。鎧騎士は寒気を感じた。

「簡単に言つなら、賞金首ってやつ？ 都中に指名手配をしちやいました！」

「……………」

「大丈夫、大丈夫。職務に抵触してはいないって。でもね、ギリギリのラインまで頑張ったんだよ。凄くない？」

鎧騎士はマーティたち三領主と深い面識はなかった。だが、マーティの様子は異常であると判断する。

「……それであるなら、我は必要ないはずだ」

鎧騎士の言葉に、マーティは「ブッブー！」と否定する。

「あつまーい！ そんなんじゃ、楽しくないでしょ。主にあたしが。それに、この任務の反論は受け付けませーん」

マーティは鎧騎士に背を向けた。にやり、と口元に笑みを浮かべる。

「それじゃ、頼んだよ。名無しの騎士さん」

マーティは現れた時と同様、空間を裂いてどこかへ去って行った。鎧騎士はそれを見送る。背後　神殿の方角を見つめ、振り切るように歩き出す。

「すべては、我が主^{あるじ}のために」

空っぽの鎧の中に響く声には、どこか強い決意が滲んでいた。

2 - 5 水の都

スノウとアクセルは砂漠を抜け、水に覆われた都市へとやって来た。

水の都。

ここではそう呼ばれる場所だった。そして都の姿を見ると、みんなその名前に納得する。

水の都はガラス張りの地面である。ガラスの下には水が常に流れており、下に敷き詰められた苔によって、水は淡く発光しているのだ。建物の壁はガラス張りではないものの、水が止まる事なく流れている。その流れている水も地面と同様に発光していた。初めてその都を見る者は感嘆の溜息を吐く。それほどまでに、この都は幻想的で美しい。

だが、それと同時に恐怖を覚える者がいるのも、また事実。

その筆頭が鉄属である。

彼らは水に対して苦手意識を持つ。その事もあり、水気の多い所も同様に嫌うのだ。よって、水の都は鉄族に対しては鬼門である。

アクセルは都に着くと、いつもよりも若干早目に歩いていた。出来る事ならば、この街に留まる事などせずに、さっさと出て行きたいのである。スノウは早足で歩くアクセルの後を必死でついて行く。しかし、アクセルはスノウの事など気にも留めない。

「ま、待って」

スノウは堪えかねてアクセルに声をかけた。

アクセルもスノウに呼ばれた事に気付き、足の速度を緩める。

「どうした」

振り返るアクセルは、足を止めようとはしない。しかし、先程よりもずっとよかった。

「なんで、そんなに急ぐの？」

「オレは水が嫌いだ」

再び正面に向き直り、歩き始めるアクセルに縋りつく様にスノウは走る。

「な、なんで？」

アクセルの正面に立ち塞がり、スノウはアクセルの足を止めた。

アクセルは怪訝そうに眉を寄せる。

「お前が砂を嫌うのと同じ理由だ」

「……アクセルは、くろがね属？」

「ああ」

アクセルは苦々しく頷いた。

「いやなら、なんでここに来たの？」

「通らなければ、目的の場所に行けんだ」

この世界には三つの都市しかない。しかし、都市と都市の間は砂漠がある。そして、煉瓦の街から一番近いのは水の都であった。強引にもう一つの都市に行く事も、出来なくはないが、距離が倍ほど長い。おまけに砂漠から途中で沼地に変わる。ようは、悪路なのだ。それくらいなら、嫌でも水の都を経由した方がずっと安全である。

「そ、そうなの？」

「そうだ。この都に大して用事はない。だから、さっさと行くぞ」

アクセルはスノウの横を通り過ぎ、都の奥へと進んでいく。スノウは急いでアクセルの後へとついて行った。

アクセルは早く都から出る事を優先して注意を怠り、スノウは先へと進んでいくアクセルについて行くので必死だった。

だから、都の人々が二人を注目していた事に気がつかなかった。

人々のスノウを見る目が異常だった事に気がつかなかった。

「はい」

二人の前に小柄な人物が現れる。

スノウの胸ほどまでしかない身長。動きやすそうな服に身を包み、その身のこなしは隙がない。どこか猫を彷彿とさせるような少女だ。頭の部分はバンダナで覆っており、その隙間から出ている髪は砂漠

のような砂色をしている。そして、スノウと同じ　人型であった。
「誰だ」

アクセルはあからさまに不機嫌な声を出し、腰に差している湾曲
刀に手をかける。スノウはそれを慌てて止めた。

「ア、アクセル」

「物騒だなあ。でも、あたしの方が早いよ?」

鉄属は動きが鈍いからね、と少女は笑う。

アクセルは咄嗟にスノウの顔の前に腕を伸ばした。その腕に何か
がぶつかり、金属音が鳴る。アクセルの腕で防がれたのは小さなナ
イフだった。

「え、え?」

スノウには何が起こったのか、わからない。

「ふざけているのか」

「まあ、今のは挨拶」

少女はアクセルの言葉に、にっこりと微笑んだ。

「ルールを説明するね」

少女は腰のポーチから水晶を取り出す。それは煉瓦の町で見た水
晶と全く同じものだった。

アクセルは不機嫌そうに睨みつけるだけだが、スノウは違った。

(……なに?)

手に入れなくてはならない。いや、違う。取り返さないと。違う、
私のじゃない。

スノウは自分でもよく分からない感情が渦巻くのを感じた。

「うん。やっぱり」

少女は水晶を再び戻し、スノウに向かって歯を向けて笑う。

「あたしを捕まえない限り、ずっとこのままだよ?」

言葉の意味は分からなかった。だがスノウはそれではいけない、
と思う。理由は分からないが、突き動かす様な感情がスノウを動か
す。

「スノウ?」

アクセルはスノウの様子を訝しむ。

「……あれ、戻さないと」

どこか虚ろなスノウの目を見て、アクセルは目を細めた。

「ふうん。だったら、頑張らないとね」

「なにをだ」

話の见えないアクセルは少女を睨みつける。

「簡単だよ。鬼ごっこをしよう！」

「鬼ごっこ、だと？」

スノウは言葉の意味をなんとなく理解しているが、少女の真意は見えないらしく、怪訝そうな表情をしてる。

「あたしにとつては、あんたたちが鬼。けれど、あんたたちにとつては、この都の人全部が鬼」

少女は暗い笑みを浮かべた。アクセルはその笑みに寒気を感じる。

「……？」

「鈍いなあ。わざわざ噛み砕いて言っただけなのに。」

要は、あたしを捕まえれば水晶に触れるよ。けれど、あんたが他の人に捕まれば　どうなると思う？」

アクセルは少女の言いたい事を理解した。

「なぜ、こんな事をする」

アクセルは湾曲刀に手をかける。

少女は声を上げて笑った。

「そんなの決まってるじゃん。嫌いだからだよ、人型が」

「オマエも人型だろう」

「そんな出来そこないと、一緒にするな！」

少女はスノウを睨みつける。

「あんたなんかと、あたしは違う。あたしはあの方に選ばれたんだ！ あの方に拾っていただけたんだ！ あんたと違って、あたしは捨て駒なんかじゃない！」

「何の話だ。やっぱり人違いじゃないか？」

少女はクスクス、と笑う。

「人違いじゃないよ。人形如きが、あたしに意見するなよ」

「……とりあえず、オマエのその言い方はム力つくな」

「当然。怒らせたいんだもん。その方が張り合いが出るでしょ？」

スノウはとりあえず、水晶を奪えばいいんだと漠然と理解する。

実際は話の半分以上も理解しきれていない。

「さて、と。そっちのやる気が出た所で、始めるとしますか」

少女は後ろに跳躍する。軽く地面を蹴っただけであるにも関わらず、一気に近くの建物の屋根の上へと登っていた。

少女はにやり、と笑う。

「さあ、命がけの鬼ごっこが始まりだよ」

2 - 6 鬼ごっこ(前書き)

戦闘描写あり。設定上、ただ一人を除き流血はしません。

2 - 6 鬼^{ひるがえ}っつこ

少女は身を翻し、どこかへと逃げて行く。その背は屋根に隠され、どこへ逃げたか分からない。アクセルはすぐに追いかけようとして、周囲を囲まれている事に気がついた。手に武器を持っている者もいれば、何も持っていない者もいる。しかし、隙間なく囲まれているため、持っていないようが持っていないなかるうが、厄介である事に変わりはない。

「……厄介な」

アクセルは腰にある二振りの湾曲刀を抜く。背後にスノウを庇おうにも、円形に囲まれているため逃げ場はない。

アクセルは覚悟を決めた。

「スノウ、走れ」

「？ わかった」

状況の理解は出来ていないようだが、スノウはアクセルの指示通りに走る。アクセルは呼気と共に、スノウを一息で追い抜き、正面の人を切りつけた。相手はワタ属だったらしく、片手でいとも簡単に身体を切断する事が出来た。反対に持つ湾曲刀を横に薙ぎつけるが、強い反動と共に不快な金属音が鳴る。切りつけた相手はアクセルと同じ鉄属だったようだ。しかし水気の多い場所にいた所為か、相手の湾曲刀を防いだ腕は嫌な音を立ててずれる。関節の接続が上手くいかないらしく、腕が力なく垂れ下がった。

アクセルの背後から切りつけようとしていた相手の剣を身体をずらす事で避け、腹部に思いつき蹴りを入れる。相手の身体が軽く凹んだ手応えと共に、面白いほど飛んでいく。

「な、なんだ、こいつは！」

一瞬でアクセルとスノウの周囲から人が離れて行く。

「なるほど。オレが誰か分からずに挑んできたのか」

アクセルは二本の湾曲刀を構える。アクセルの持つ二本の武器を

見て、誰かが声を上げた。

「双刀……まさか、？双刀のアクセル？か！？」

その叫びを皮切りに、周囲の人々が更に離れて行く。

「？双刀のアクセル？だと……」

「なぜあいつがここにいる！ あいつは煉瓦の町にいるはずだ！」

クラウドがいなくなつてから、強く違和感を覚えるようになった呼び名。しかし、今回はその呼び名に助けられる事となった。

「いたら、悪いのか？」

アクセルはにやり、と笑う。

その笑みを見て、怖気づいて逃げ出す人も現れた。

「か、勝てる訳がない。たった一人で百人近い集団を、一気に壊滅させた奴だぞ！」

「そんなヤバイ奴なのか？」

「に、逃げる！」

散り散りに逃げだす人々を見て、アクセルはスノウを呼んだ。スノウは驚いた様子でアクセルを見る。

「今がチャンスだ。逃げるぞ」

スノウは頷いた。二人で少女の消えた方角へと走る。途中で進路の邪魔になる人々を切りつけ、アクセルが道を開く。二人は走った途中で屋根の上に登れそうな踏み台を発見する。アクセルはスノウを先に登らせ、自身は追手を適当にさばく。スノウが登りきつたのを確認すると、アクセルもあつという間に上がった。

「走れ」

追いつがる人の腕を適当に切り捨て、スノウの背をアクセルは追いかける。

スノウはアクセルに言われるまま無我夢中で走った。頭の中では違和感が渦巻いている。

（なんだろう……なにかが、変）

そんな事を考えている場合ではないと理解しているのだが、どう

しても考えてしまう。

（でも……なにが変なの？）

アクセルが相手を切りつける度、その違和感はずす。

そんな事を考えながら走っていると、アクセルに踏み台を示さた。その踏み台に乗り、水で滑る手元に苦労しながら屋根の上に登る。

この都の建物の屋根は、緩やかな傾斜がついていた。どういう原理か、屋根にも水が絶え間なく流れている。壁に流れている水はここからきているらしい。アクセルは平気なのだろうか、と思い背後を振り返ると、アクセルは手を使う事なく跳躍だけで登りきっていた。しかし、水が付いてしまうのを防ぐ事は出来ていない。

鉄属であるアクセルには水は天敵といっても良いものだ。少しならば平気だが、長時間放置すると錆が出てくる。一度錆が出来てしまえば、錆を取り除く事は出来ない。徐々に腐食していき、最終的に腕や足を失う鉄属は多いのだ。

「走れ」

アクセルに促され、スノウは走り出す。アクセルも登ろうとする相手の腕を切りつけてから走った。

「ど、どっちに行けばいい？」

「知るか」

スノウはアクセルに聞きつつも、足が目的を持って勝手に走り出している事に気付いている。アクセルは何も言わずにスノウの後について来ているだけだ。

屋根と屋根の間を跳んで渡っていくと、一際高い建物の屋根の上に少女がいるのを発見した。

「ありやりや、もう見つかったっつた」

その屋根は他の建物とは違い、屋根の斜面が急になっている。少女は真ん中の境目の部分にしゃがみ、肘をついてこちらを見ていた。「いや、やっぱり引き寄せられるんだねえ。可哀そうに」

「水晶。返してください」

少女のいる建物の前には広場の様な広い空間が広がっている。跳

んで建物に移るのは無理だった。

「嫌だね」

少女は立ち上がり、水晶を取り出す。

「これが返してほしかったら、ついて来てみなよ。鬼ごっこだって言っただしょ？」

アクセルは湾曲刀を少女に投げつけた。湾曲刀が少女に当たる寸前、少女はナイフでそれを防ぐ。しかし、完全に防ぐ事は出来なかったのか、腕に赤い筋が走っている。

（……あれ？）

そこでスノウは違和感が何であつたかを、ようやく掴んだ。

「……血？」

アクセルに切られた人々は血を一切流していない。スノウはその事に対して強い違和感を覚えたのだ。

（そうだ。みんな、血が流れていないんだ……）

スノウの思考を破るように、少女が癩癩かんしゃくを起こす。

「ちよつと、ちよつと！　なんて事してくれんのよ！　このマーティさんに傷を付けるなんて、さいつてーっ！　男の風上にも置けないねっ！」

少女の言葉にアクセルは眉を顰める。

「なにを言っている。そんなのは怪我の内に入らないだろ」

アクセルの感覚ではそうだろう。実際、アクセルに腕や上半身を切断されている者もかなりいるのだ。それと比べれば、少女の傷は気にする程度でもないのだ。

けれど、スノウは少女のように、血を流す存在を知っている。具体的にどういう存在かは覚えていなかった。しかし、その存在は自分たちとは違い、簡単に傷が治らないことは知っていた。

「確かに、掠り傷だけださ！　あんたたちと同じにすんなよ。あたしは、あんたたちとは違うんだから！」

「同じだろう」

アクセルの言葉に少女はバンダナで覆った髪をぐしゃぐしゃに搔

き混ぜる。その拍子にバンドナがとれるが、少女は気にしていない。

「だあーっ！ だからあたしは、あんたらが嫌いなんだよ。無頓着で、無神経！ マーティさんの繊細な心はズタズタだよ！」

顔を上げた少女の頭には猫のような耳が付いていた。

「もつとあたしを^{いたわ}りやがれ！」

「無理だろ」

アクセルは即答で少女の言葉を切り捨てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773w/>

星屑たちの祈り

2011年10月9日03時26分発行